



「町田の底力」NPO・地域活動フェスティバル開催

市内の町内会・自治会、NPO、市民団体が多数参加し日頃の活動を発表

2月14日(土曜日)午前10時から午後7時まで、町田市内のNPO法人や町内会・自治会などの活動を紹介するイベント、第2回NPO・地域活動フェスティバル「町田の底力」が市民ホールで開催されました。このイベントでは、各種団体による展示のほか、TBSのキャスターを務めた平本和生氏(町田市在住)の講演会とパネルディスカッション「地域の活性化と市民協働」がおこなわれました。



各団体の展示を熱心に見ている来場者

市民ホール全体を使って出店多数

1階のエントランスホールでは成瀬で若者に人気のカフェ「金魚玉珈琲」(成瀬1-2-6、11:30~25:00、月曜のみ17時閉店、毎週水曜日定休)が、お店の名物「瓶詰めプリン」を特別販売したほか、ヤクルトやNPOによる物販コーナーなど多数出店しました。また、会議室を使って三ツ又冒険遊び場たぬき山、きつねはらっぱ冒険遊び、相原冒険遊びの会が合同で即席の遊び場をオープンさせました。

2階のホール横と4階のギャラリーには、各地域の町内会・自治会のほか、町田発・ゼロ・ウェイストの会や町田市少年少女発明クラブといった各種団体による、日頃の活動成果を紹介する展示ブースが設けられました。そうした

なか、町内の環境委員会が独自にリサイクル広場への支援活動をしている響きの丘町内会のみなさんは、会場を巡回して撮影していたJ:COMのカメラに、自分たちの取り組みを熱心に説明していました。

講演会とパネルディスカッション「地域の活性化と市民協働」

ホール内では午後から、現在はTBS専務取締役である平本氏の講演がおこなわれ、ひきつづいてパネルディスカッションにうつりました。パネリストには明治大学の牛山久仁彦先生をはじめ、瓜生ふみ子氏(まちだNPO法人連合会会長)、中里孝夫氏(町田市町内会・自治会連合会会長)、竹中譲氏(FC町田ゼルビアコーチ)に石阪市長という顔ぶれ。会場との質疑応答も活発でした。

50周年記念事業もいよいよ終わりに近づき

「あなどれません。町田」をコピーにかかげ、1年間にわたってさまざまなイベントや企画が打たれてきた市制50周年記念事業もいよいよ残りわずかとなってきました。単なる一過性のものではなく、町田市のつぎの50年を見すえて、重要な問題提起をした、あるいは今後につながる成果を挙げた事業が一体いくつあったのでしょうか。予算の総執行額とあわせて、きちんとした事後検証が今後は求められます。



柿原会員と町田市少年少女発明クラブの展示ブース

第67号目次

「町田の底力」NPO・地域活動フェスティバル開催	1
玉のよこやま未来史シンポジウム「ふるさとのか」	2
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(二)	渋谷 謙三 4
玉のよこやま未来史シンポジウム:番外編「アートの力」	向谷 有加 7
事務局だより・編集後記	8

玉のよこやま未来史シンポジウム「ふるさとの力」

昨年 2008 年 11 月 22 日から 24 日にかけて開催された屋根のない博物館「玉のよこやま」アート&ウォーク（以下「屋根のない博物館」）。これは町田市制 50 周年事業として、町田市と包括連携協定を結んだ大学に在籍する文化・芸術系の学生で組織された実行委員会（「玉のよこやま」アート&ウォーク実行委員会：委員長は佐藤東洋士桜美林大学学長）が企画・運営を委託され、町田市立博物館の総括のもとで計画準備が進められたものです。

「屋根のない博物館」事業は「二つの道の整備」を核として始まりました。ひとつはミシュラン観光部門で三ツ星を獲得した高尾山からのウォーカー誘致を意図して京王線高尾山口と堺地区を結ぶ、「玉のよこやまウォーキングの道」。もうひとつは堺地区の鉄道駅を起点と終点にした「街角ギャラリー通り」です。前者はエコツーリズムからのまちづくりの発展を企図したウォーキングコース、後者はこの地に文化・芸術系大学が集中することにより発案された、相原地区の「アートマーケットタウン」化を誘導していくための磁場作りを目的としたもので、双方ともにエコミュージアムの観点から、経済に頼らないまちづくりの資源発掘をめざした事業と位置づけられました。このふたつの道のお披露目と試行をメインイベントとして、「屋根のない博物館」開催期間中には 57 団体による各種イベント、パフォーマンスが行われ、相原町を中心に 40 以上の会場で市内外約 11,000 人以上を動員する大きな催しとなりました。

さて、開催から 3 ヶ月が経った 2009 年 2 月 22 日、「屋根のない博物館」の最終イベントとして玉のよこやま未来史シンポジウム「ふるさとの力」が桜美林大学プルヌスホールにて開催されました。今回の「玉のよこやま」での収穫を今後どのように活かしてゆくの、未来志向でその可能性を話しあう場所となりました。

シンポジウムのながれ

まず、町田市副市長の岩崎治孝氏が開会の辞を述べられました。今回の「屋根のない博物館」によって先の 50 年の思いと力を次の 50 年につなげ、町田市の文化、芸術、歴史を積み重ねていきたいと、



副市長は町田の過去と未来の年月のつながりを強調し、関係者の方への感謝の言葉で締めくくられました。続いては「映像で振り返る『玉のよこやまアート&ウォーク』」。いくつかの主要イベントのようすをそれぞれの担当者が映像とともに紹介しました。まずは学生カフェ、コミュニティカフェの「slow boat」。なんとこちらは、現在も黒字経営で営業中です。「slow boat」は屋根のない博物館第 1 号館として始まった学生カフェであり、副市長も開会の辞のなかで「2 号館、3 号館と続いてほしい」とエールをおくっていました。つづいては神輿「天晴」。高尾山不動院で授かったご神水とともに相原町大戸観音堂から諏訪神社までお御輿「天晴」を担いで道拓きのセレモニー、パフォーマンスが映像で披露されました。このふたつの試みにくわえて、昨年の「屋根のない博物館」の様子が映像で紹介された後、講演がふたつ続きました。

記念講演 1 法政大学教授 馬場憲一氏による「エコミュージアムの思想と実践」

馬場先生からはフランスで始まったまちづくりの思想「エコミュージアム」の紹介があり、また、国内のいくつかのエコミュージアムの事例を紹介しながら、とくに地域文化政策と文化遺産保護の専門家としての立場から今後にかかわる提言がなされました。

記念講演 2 事務局長渋谷謙三氏による「ふるさとづくり 50 年」

当市民会議の事務局長である渋谷謙三氏が、ご自身の町田まちづくりへの 50 年にわたるかかわりの歴史を当時のエピソードとともに披露されました。とくに都市としての急速な発展のなかにあった町田市で成功した「23 万人の個展」と今回の「屋根のない博物館」とは、「みんなを楽しませよう」という思想のもとに生まれた点でつながっているというのが、渋谷氏による「屋根のない博物館」にたいする視点でした。さらに渋谷氏は、町田市には過去 50 年の歴史のなかで、市民が行政の動きを飛び越えて新しい実験的試みをさまざまに実現した歴史が脈々とあることを紹介しました。そして「考えながら歩くまちづくり」という言葉に象徴される町田のまちづくりのノウハウが、50 年にわたって蓄積されていることを指摘して手短かに話を結びました。



パネルディスカッション「ふるさとの力」

ふたつの講演後、休憩をはさんでのパネルディスカッションにはパネリストとして堀内貴和氏（司会）、青木幸雄氏、遠野町子氏ら 8 名がパネリストとして参加しました。パネリストのみなさんはみな、ユーモラスに現場の苦労話を語られ、ざっくばらんなディスカッションとなりました。印象的だったのは青木氏が大学をつうじてではなく直接近隣の大学に通う学生に声をかけて「街角アートギャラリー」の動きの核を仕掛けていった話。もうひとつは、低予算、短期間にもかかわらずこの「屋根のない博物館」が大規模な成功をおさめたのは、ほかでもない「地域の人びとの協力の賜物」だったという松田重仁氏の感想でした。学術的なエコミュージアムの概念をこえるダイナミックな「人の力」に支えられ、達成された「屋根のない博物館」の貴重な舞台裏がうかがわれるパネルディスカッションとなりました。

関係者へのねぎらいの拍手に満ちて

パネリストによるディスカッションを終えたあとは、司会者が会場にいたイベント関係者にもマイク



クを向け、それぞれの話を聴きました。各イベントの関係者の尽力に、あたたかいねぎらいの拍手が起こりました。まとめとして馬場教授から、エコミュージアムとしての「屋根のない博物館」の評価と今後への提言が述べられ、町田市立博物館館長、田邊三郎助氏の閉会の挨拶のあと、最後に桜美林大学の学生によるさよならコンサートが催され、シンポジウムは無事に幕を閉じました。

町田のまちづくりの根底にあるもの

「屋根のない博物館」はエコミュージアムという比較的新しいまちづくりの手法にのっとった試みですが、

渋谷氏の講演中の指摘にあるように、町田独自のまちづくりのありかたが息づいたイベントであると見ることができます。また、ごみゼロ市民会議をはじめ、2 月 10 日の花のまちシンポジウム in まちだや F C 町田ゼルビアの昇格・・・といった町田における近年のさまざまな動きと「屋根のない博物館」を成しとげた精神とは、根っこのところで町田のまちづくりの考え方を共有しているように感じました。地域のいろいろな人の動きによって成功した今回の「屋根のない博物館」。今後この試みがどのような「ふるさとの力」を生み出すのか、注目したいと思います(編集担当補佐：向谷有加)。

渋谷 謙三

■公僕の始まりーまるで野球が仕事？だった

私は、1958年(昭和33年)の8月25日に、合併で新しく市制を敷いたばかりの町田市役所に採用され、市の教育委員会事務局に配属された。だが、これは、年来の望みだった公立学校教師の口が皆無だったために、当時の私としては大変に不謹慎な言葉だが、一時の避難宿的な就職先だと考えていたことは本当で、前回も触れたとおりである。

さて、誕生した時の町田市の人口は僅かに6万1千人強で、市役所の建物は原町田5丁目の市健康福祉会館の隣接地にある、現在、市の福祉事務所高齢者福祉課が使っている粗末な二階建の木造建物だった。

市教委事務局は、その二階の一隅を占めていたが、陣容は井上圭一教育長以下新入生の私を入れて僅かに12人と記憶している。教育長は、つい先年まで同じ町田の教育委員会で委員長をやられた井上恭一氏の父君で、実に温厚篤実な方だった。係長二人は共にお寺の住職で、一人は鬼頭学校教育係長(現市税務部長の父君)、もう一人は磯野社会教育係長(現宏善寺住職の父君)で、私はこのお二人にもお世話になった。

私の最初の仕事は鬼頭係長の下での学校給食係で、戦後のアメリカからの救援物資(?)の小麦粉を市内のパン屋に加工発注して各学校に届けること、これも同じアメリカからの脱脂粉乳を学校で溶かして子どもたちに飲ませること、もう一つは日雇い制度だった給食作業員の日給を週単位で支払う仕事などが主なものだった。

最初は、大学を出て就職したのに、こんな仕事をやらされるのかとガックリする思いだったが、確か12の小学校に2人ずつ配置された給食作業員の女性たちからは、神様みたいに崇められ、なぜそうなのかも考えずに、唯々居心地のよさだけを味合う毎日に次第に慣れっこになっていった。

そんなわけで、私の公僕としての初めての仕事は、この際立って単純明快で、ほとんど考えることなし・困ることなしの、毎月同じことの繰り返しだけのものだった。

その上、市制が敷かれたとは言え内実は町や村役場のままの雰囲気、3月3日の桃の



町田市教委・学校給食担当・渋谷謙三(24歳)

節句にでもなれば、職員は当たり前顔をして、根拠もないのに半日でさっさと家に帰ってしまったり、年配者の机の最下段の引き出しを開けると、いつもお酒の1升ビンが貯蔵されていて、残業にでもなると湯飲み茶碗がお猪口に変わるという役人天国の見本みたいな状況が廃止されずになおも続いていた。

今ではもう、行政改革の旗手みたいな言動を振り回す私が言うのも妙な話だが、当時の私の公僕生活のスタート時をふり返ってみる

と、「まるで野球が仕事？そのもの」のような毎日だったが、なぜか反省することもなく過ごしていた。いまは慙愧に堪えない気持ちでいっぱいになるのだが、当時を思い興してみると、野球部の選手たちには恵まれた時代でもあった。試合ともなれば、必ず多くの女子職員が応援に駆けつけた。私は、小柄な新人だったが初めからスター気取り



市代表として都下大会に出場した町田市役所野球部(1960年)

でいた。私が卒業した新制中学の八王子五中は、当時は八王子市内で鳴り響いていた強豪で、私はそこの花形遊撃手だったから、そう簡単には誰にも負けないという自負心があった。

町田市役所野球部と言えば、今は市内社会人野球界の強豪だが、当時は出ると負けの弱小チームだった。私はすぐに入部せずに、暫くは野球部の試合を遠くから観察し、このチームを強くするための処方箋を考えながら、颯爽と登場できる機会を伺っていた。

その時がきた。ある試合前に、S監督がベンチの後ろで見物する私に「君は野球が好きそうだが、一緒にやってみないか」と声をかけてきた。私は即座に「そうですね、選手も少ないが、もっと基礎とマナーを身につけないと強くなれませんよね。審判員もない練習試合では選手は育たない。私が主審をやりましょう」と言い、返事も待たずにホームベースに立ち、攻撃側のキャッチャマスクを借りて、一方的に試合開始を宣言してしまった。ボール、ストライクの宣告はデカイ声で、選手の交代は駆け足で、判定に文句を言う選手には、もう一度言えば退場させると釘を刺し、観客席からの野次には「静かにしなさい」と大声で忠告した。その結果は、草野球は草野球なりに試合そのものがきびきびとしまり面白く回り始めた。試合が引き分けで終わると、私はグラブを借りてキャッチボールを始めた。先輩職員が周りを取り巻いて見物し始めると、「試合が終わったら、必ずこうして10分間は肩慣らしをやってください。素人野球では、肩を壊したら即引退ですから、ぜひ守ってください」そう言ってから、サッサと自転車で帰ってしまった。私の作戦は図に当たり、翌日、S監督は先輩を二人連れて私に入部を勧誘に来た。私は喜んで入部し、翌年に最も若い主将になり、2年後には推されて監督に就任した。一番打者、三塁手のプレイングマネージャーとしてチームをひっぱり、市内社会人野球大会、春夏10回連続優勝を成し遂げた。その間、時期は忘れたが、町田市代表で東京都下社会人軟式野球大会で決勝に進み、日野オリエン時計に1対0で敗れたが、その時私は監督兼三塁手・八番打者として全試合出場し、大会首位打者に輝いた。貧しい私の野球暦での忘れられない一ページである。その後私は、今は亡き小川恒徳君に監督を引き継いでもらい野球部生活を7年で引退した。ちょうど30歳を過ぎたばかりで、市教委事務局を卒業し、市福祉事務所の青少年係に異動する直前のことだった。

■恋愛—結婚—子づくり

野球を忙しくこなしながら、他方で、もうひとつのふるさとづくり活動に専念した。中国人の古い言い伝えに「自分の意志は、いつか自分の孫の代に成就させる」という言葉があると聞いた。私の幻灯譜への強い励ましとも思い、躊躇わずに筆を進めよう。

50年前の1958年、私は新入生10人と一緒に市役所入りしたことは前号に書いた。その中に、うら若き女性たちが4-5名いたが、私はそのうちのひとりと恋におちた。就職してちょうど半年が経った時で、女性の名は井上貞子と書いた。

当時、市役所の給料日は毎月25日で、給与袋で上司から手渡されるのが慣わしになっていた。私は勤め始めて以来、給料日には決まって久美堂書店に立ち寄って、新刊書を2-3冊買い漁るのを楽しみにしていた。

忘れもしない就職翌年の半年後の2月25日、例によって私は小田急駅前の久美堂書店の中で新刊書を立ち読みしていた。すると、私の前をにっこりと微笑みながら通りすぎようとする若い女性と目が合った。

「やあ、井上さんだったね、渋谷です、渋谷」少し興奮気味に。「本買われるんですか？ わたしもちょっと洋裁の本を探しに来たんです」「そうか、偶然だなあ。どうコーヒーでも一緒に？」我れながら、とても自然に、出来すぎた言葉だった。

以前から、「かわいい、かわいい」と何人かが噂をするのを聴いていて、私が「少しもそう思っていなかった」と言ったらウソになる。だが、前々から狙っていたのか？ とときかると少々返事に困る。

初のコーヒーデートは、駆け足通りの確か「ロッセ」？だった。その年の秋の青年婦人部ハイキング(写真)で二人は急接近する。これ以上喋るとお家騒動となり兼ねないので、続きは私の小説「バクテリア課長・糞戦記」をお読みになることをお奨めする。



若々しい青婦部ハイキング一行の中で

私たちは、それから2年後の2月25日、早朝から小雪が舞い降り、しっかりと地固めをしてくれる中、自宅で式を挙げた。1961年の春、謙三26歳、貞子21歳だった。

私たちには、女子二人と男子一人の三人の子宝が授かった。そしてそれぞれが自分で結婚相手を見つけ、今では、男子五人、女子二人の合計七人の孫たちに恵まれ、それぞれが元気な子育ての真っ最中である。

私は、彼らがこれからどこでどのように暮らそうとも、彼らが住み、働き、旅する場所で、必ず自分のふるさとと呼べるものを探し出すこと。そして、その地域と人々のために少しでも役立ってくれることの二つを、いま心から願っている。(次号に続く)

玉のよこやま未来史シンポジウム：番外編「アートのカ」

向谷 有加

桜美林大学のプルヌスホールでおこなわれた4時間におよぶシンポジウムは、講演やパネル・ディスカッション以外の部分でも、とても趣向をこらしたものでした。オープニングとエンディングではアンサンブルコンサート、会場には彫刻や書画といった作品が展示され、来場者には玉のよこやまオリジナル菓子がプレゼントされるなど、目にも耳にも味にもうれしいサプライズがしかけられていたのです。

シンポジウムの開会と閉会を飾ったのはアンサンブルコンサートでした。「玉のよこやま」事業のために桜



美林大学の松岡邦忠先生が書き下ろしてくださったというオリジナル曲を、先生の音楽制作ゼミの学生さんが合奏しました。様々な表情の風が吹いてくるような演奏を、この紙面でそのままご紹介できないのが残念です！（左の画像はコンサートの様子。フルート：鳩野由佳さん、ピアノ：小林弥生さん、シンセサイザー：植田菜由子さん、打楽器：門川まゆこさん。舞台の中央にはアート作品も置かれています）。また、パネル・ディスカッションの合間には、小日向庸三氏による颯爽としたピアノ演奏もおこなわれました。



はすの花(松田重仁氏作品)



下の画像は、会場内に展示された小林陽光氏の作品です。このふたつの作品は高尾山不動院、町田諏訪神社にそれぞれ奉納される予定だそうです。



いろんな個性をまきこんだ今回のエコミュージアム。この試みがどのように継続されるのか。相原から始まる町田の未来像に期待がふくらみます。

事務局だより

定例会のおしらせ

・4月の定例会は4月1日(水曜日)です。

中央公民館 学習室(3) 18:00~

2008年度総会について

3月14日(土曜日)におこなわれる今年度の総会につきましては、今号の会報にはさみこまれている別紙をご参照ください。

さくらまつりで今年もエコ・ステーション

町田市春の一大イベントとして毎年市内外からの大勢の人でにぎわうさくらまつり。今年は3月28日(土)~29日(日)に芹ヶ谷公園で、4月4日(土)~5日(日)に小山田の尾根緑道で、それぞれおこなわれる予定です。

昨年は、町田発・ゼロ・ウェイスト宣言の会を中心とした市民ボランティアによって、おまつりで出た資源になるものを分別して回収するエコ・ステーションが実験的におこなわれましたが、今年度もNPO法人となった町田発・ゼロ・ウェイストの会を中心におこなわれることになりました。エコ・ステーションには、本紙記事でもたびたび登場して下さっています。桜美林大学の環境サークル「エコレジ」のみなさんも協力して下さるとのこと。ほんとうに心強いかぎりです。

今年はさらにエコ・ステーションにくわえて、参加出店する飲食の団体すべてで、リサイクル可能な容器かあるいはリユース食器を使用する方向で準備が進んでいます。

環境負荷を減らす試みを続けるさくらまつりに、ぜひ今年も足を運んでみてください。



編集後記

今号では2月14日(土)に市民ホールで開催された「町田の底力」、2月22日(日)の午後、桜美林大学淵野辺キャンパスでおこなわれた玉のよこやまシンポジウムにくわえ、事務局長の好評連載で紙面をお届けしました。玉のよこやまシンポジウムでは市内の和菓子屋さんが特注した和菓子、その名も「きみしぐれ 玉のよこやま」が配られたそうです。お味のほうは、卵の風味が生きたほのかな甘さとのこと。



なお、この2月にはその他にも、2月7日(土)に日本フットパス協会の設立を記念したシンポが町田市文化交流センターで、2月10日(火)に町田市花壇コンクール実施35周年を記念した「花のまちシンポジウム in まちだ」が市民ホールで、2月21日(土)には「みんなにひろがれ『農』の魅力」と題して北部丘陵のシンポが市民フォーラムでそれぞれありました(H.I.)。

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報

2009年3月2日第67号発行

発行者 佐藤東洋士

編集責任者 井上弘貴

事務局 常盤町桜美林大学内

TEL 042-797-6947